

共働き家庭のための住空間（その2）

— 住居志向と行動様式 —

中 島 喜代子

I、序 論

前報で、家事労働を合理化、団らんする住空間を生活時間の側面から検討したが、共働き家庭の住空間を考えるためには、住空間に対する志向や、行動様式を知ることが必要である。ところで、社会的、歴史的、地理的一定条件下で、一定の集団に於て慣習的に形成された行動体系が行動様式^{註(1)}である。例えば、茶の湯の行動様式、武士の行動様式といったものであるが、共働きという生活体系、生活要求の条件下で、それに見合った住空間を考えるためには、この行動様式について考察せねばならない。しかし、まだまだ一般的に共働き家庭の生活にも古い封建遺制が存続していると考えられる。つまり、家事が女の仕事とされ、また女がそうした意識を持って家事労働を行い、その中から一つの行動様式を生みだしている。こうした行動様式が、家庭内における男女の地位的差異にもつながって行くと考えられる。この身分序列的意識が、住空間に一番強く反映されるのが、台所と接客空間である。台所は、階級が発生した段階から、召使いの居住する空間として、住空間の中で一段と低い位置に置かれ、そうした住空間のあり方が、明治以降にも引きつがれ、召使いを使わない住宅においても、女の居住する一段低い空間として位置づけられてきた。接客空間も同様に、身分差を表現する空間として歴史的に表現されてきている。つまり、台所は、対家族内的な男女差を表現し、接客空間は、対家族外的にそれを表現している。封建時代から現代まで、現象的には様々な変化がみられる。例えば、職業構造の変化や、消費生活の変化、家族構造の変化(核家族化、子供数の減少、高齢化等)、教育レベルの高上、家意識から個人尊重意識への変化、共働き家庭の増加、家事の合理化等が考えられる。しかし、基本的に女が家事をするという意識、実態に大きな変化はなく、代替化も殆んど行なわれておらず、家事労働を通じて、こうした本質的に不変な部分が存在する。

そこで、本報では、面積や室数という客観量でない住み方、使い方としての住空間の実態、住空間に対しての志向、行動様式について、①夫と妻の違い、②家族指向と個人指向、③家事労働と接客、④家族の性質(家族型と、共働き家庭及び専業主婦家庭)、の観点から分析を行い、共働き家庭のための住空間について考察する。

注

1. 西山卯三、広原盛明：行動様式の研究 日本建築学会論文報告集 昭和39年9月

II、調査方法および調査対象の概要

1. 調査方法

三重大学教育学部家庭科を昭和 28 年卒業以降の者の中から、無作為に 220 名抽出し、郵送によるアンケート調査を行った。回収数は 119 票で、回収率は 54.1%である。このうち未婚者 7 票、無効 2 票で、既婚の有効票数 110 票を得た。調査期日は、昭和 51 年 7 月である。

2. 調査対象の概要

調査対象は、核家族 68 件 (61.8%)、拡大家族 42 件 (38.2%)、共働き家庭 82 件 (74.5%)、専業主婦の家庭 28 件 (25.5%) である。調査対象の性格上、共働き家庭が非常に多くなっている。共働き家庭では、拡大家族の割合が高く、育児、家事の姑への依存が高い。また、専業主婦の家庭（以後専業と略す）で、拡大家族の場合、家族周期末子学校教育後期以降の家庭が全くないことから、拡大家族で子供の大きい家庭では、共働きへ移行することが考えられる。（表 1 参照）主婦の職業は、やはり 96.3%が教師である。住宅は、専用住宅 89.1%、独立住宅 76.4%、持家 85.5%で、持家の専用独立住宅が一般的である。

表 1 調査対象世帯の概要

家 族 周 期	共 働 き 家 庭				専 業 主 婦 家 庭				合計 (%)	
	核 家 族 (%)		拡 大 家 族 (%)		核 家 族 (%)		拡 大 家 族 (%)			
(0)新 婚 子 無 し	2	4.3	—	—	—	—	—	—	2	1.8
(a)長子誕生から 末子就学まで	22	46.7	14	40.0	8	38.1	5	71.4	49	44.5
(b)末子 小学 3 年まで	8	17.0	3	8.6	6	28.6	2	28.6	19	17.3
(c)末子小学 4 年 から中学まで	6	12.8	5	14.3	—	—	—	—	11	10.0
(d)末子 中 学 在 学 中	6	12.8	11	31.4	5	23.8	—	—	22	20.0
(e)末子高校以上	3	6.4	2	5.7	2	9.5	—	—	7	6.4
合 計	47	100.0 (57.3)	35	100.0 (42.7)	21	100.0 (75.0)	7	100.0 (25.0)	110	100.0

() 内は、共働きと専業主婦家庭における核家族と拡大家族の比率

III. 調査結果および考察

住空間、所有物、人間関係、住意識、行動様式は、お互いに関連を持ち、影響を与えあっていると考えられる。そこで、まず住空間、所有物の実態の把握、住意識の把握、さらに住空間と住意識の関連、最後に行動様式について、人間関係を織りまぜながら、考察を行う。

1. 住空間の実態とモノの所有状況

1). 住空間型

住空間は、部室の数と種類、面積だけでは余裕があるとも不足とも限定できないので、家族との関連を含めて、住空間型を設定し、家族型、専業・共働き家庭別にその割合をみていく。この住み方の実態は、現実の住宅の枠内での住居志向の現実への反映と考えられる。こ

ここで設定する住空間型は、まず基準として、居間、食事室、台所という家族の使用する公室が、家族の就寝室から独立しており、また、家族の就寝については、夫婦が3才以上の子供と分離して就寝し、6才以上の子供もそれぞれ独立した個室を持っていて、その他の用途の部屋を所有していない場合を充足型とした。これを基本として、これより他の部屋を所有する場合を余裕型、他の部屋を所有しているにも関わらず、6才以上の子供が共用室の状態にあるか、3才以上の子供が親と同一室で就寝している場合を矛盾型CC、公室で家族が就寝している場合を矛盾型PFとする。また、充足型における部屋数より少く、PFやCCの状況にある場合を不足型とした。全体的に余裕型が多いが、矛盾型は、核家族と拡大家族との比較では、拡大家族に多く、共働きと専業家庭との比較では、専業家庭に多くなっており、室に余裕のあるのは、拡大家族と共働き家庭においてである。つまり、核家族の専業家庭（以後核専と略す）で一番室に余裕がなく、拡大家族の専業家庭（以後拡専と略す）で一番矛盾した住み方となっており、また拡大家族の共働き家庭（以後拡共と略す）が一番余裕を持ち、矛盾の少ない住み方となっている。（図1参照）

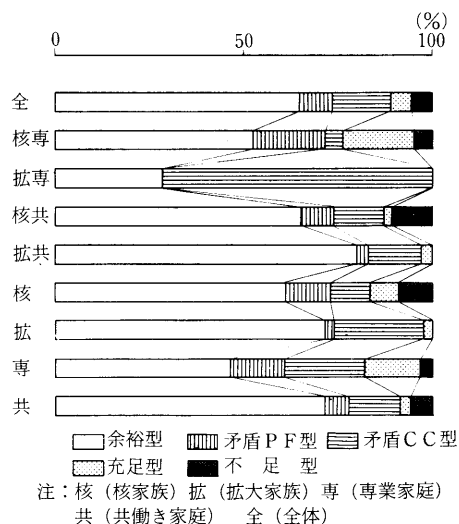


図1. 住宅型

次に、余裕型と矛盾型において、居間、食事室、台所、就寝室以外にどのような室を所有しているのかをみることにより、住居志向のあり方を見る。（図2参照） 余裕型、矛盾型ともに、接客室と納戸の所有率が高くなっており、余裕ができるとまず、接客室と納戸を所有すると考えられる。^{注(2)} 部屋別にみると、接客室では余裕型が一番所有率が高く、これは部屋に余裕ができるとまず接客室を所有するためと考えられる。納戸は、矛盾型PFが一番高く、これは、納戸にしている部屋の狭さのためこの部屋で就寝できず、納戸の機能が独立したと考えられる。しかし、それ以外の部屋は全て矛盾型CCが一番高い所有率を示している。矛盾型PFは3者の中では納戸以外の部屋で一番低い所有率を示しており、これは部屋の余裕のなさから引き起こされた部分が大いと考えられるが、矛盾型CCは、納戸と接客室以外の部屋で一番高い所有

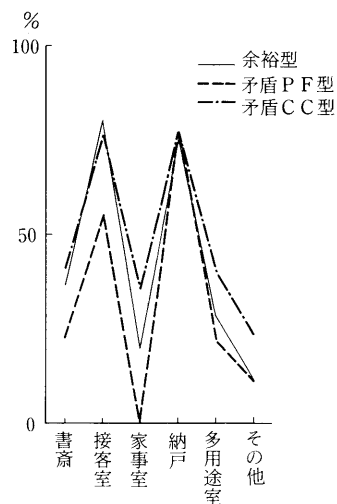


図2. 住宅型別室の所有率

率を示しており、これは部屋の余裕のなさからくる原因というよりも、この住み方を肯定するという住意識による影響であると考えられる。

2). 台所型

家族の性格と台所型の実態との関連について検討する。台所型は、^{注(3)}KA型(独立キッチン)、KB型(台所で簡単な食事をする型)、DK型、LDK型、F・R型(DK型の中で団らんも行い、食卓セットと同一の家具で団らんもする点でLDK型と違いがある。)で、核家族と拡大家族との比較では、拡大家族の方がKA型が多く、専業と共働きの比較では専業でKA型が多くなっている。これは、共働き家庭における家事労働の合理化の必要性による影響と、拡大家族の家族人数の多さ、家族構成の複雑さによる影響が反映されていると考えられる。ちなみに、台所の食事室、居間への開放の度合を順序づけて、KA型を1点、KB型を2点、DK型を3点、LDK型を4点、F・R型を5点として、各家族の性質別に平均点を出すと、核家族と拡大家族の差より、専業と共働きの差の方が大きく、家事労働の合理化による影響の度合の大きさが確認できる。よって、拡専が一番開放度が低く、核共が一番開放度が高くなっている。(図3参照)

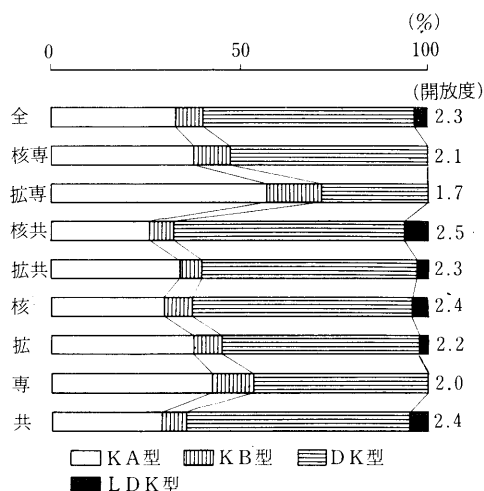


図3. 台所型の実態

3). 接客室型

接客がどのような室を使って行なわれているかによって接客室型を設定し、家族の性格によって接客室のあり方がどう違いを持つかを検討する。接客室がどのような行為と分離あるいは結合しているかによって以下の5分類を行う。まず、専用の接客室のある場合、居間で接客が行なわれる場合(以下LGと略す)、家族の寝室で接客が行なわれる場合(以下CGと略す)、家族の寝室と居間が同一室で行なわれさらにそこで接客が行なわれる場合(以下CLGと略す)、書斎で接客が行なわれる場合(以下書Gと略す)の5パターンである。家族の性質別にみると、核家族より、拡大家族の方が専用室型の割合が多く、専業より共働きの方が専用室型が多いが、その差は、前

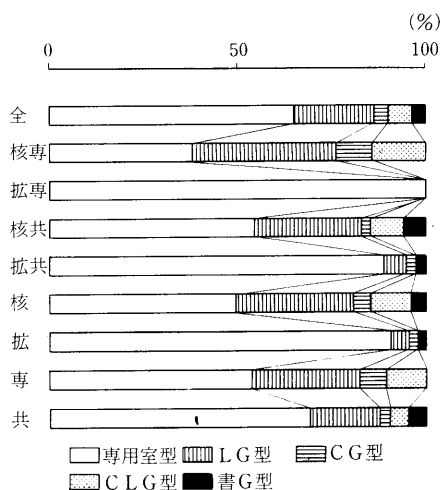


図4. 接客室型の実態

者の核家族と拡大家族との差の方が大きく、家族人数、家族構成の複雑な拡大家族では、接客室を他の部屋から分離することが必要だと考えられていることがわかる。(図4参照)

4). 個室型

個人尊重意識がどの程度存在するかを個室の状態でみるため、個室型を設定し、家族の性格との関連をみる。個室型は、まず夫婦の寝室と6才以上の子供についてはそれぞれ専用の個室がある場合を専用室型、家族の寝室と居間が同一室である場合をPF型、6才以上の子供が共用室を所有している場合をCC型、3才以上の子供と親が同一室で就寝する場合をMC型、夫婦が分離して就寝する場合を分離型とした。分離型が、PF、CC、MCと重なる場合はそちらの方へ分類し、PF、MC、CCのそれぞれが重なる場合は、それぞれ前者の型の方に分類した。核家族と拡大家族では、拡大家族の方が専用室型が多く、専業と共働きでは共働きの方に専用室型が多い。また、拡大家族では、居間が就寝室になるPF型が少なく、就寝室が共用になるCC型、MC型が多い。核家族は逆にPF型が多く、MC型が少い。つまり、拡大家族では家族共用空間と個室空間という機能の分離が先行し、核家族では、異種機能の分離よりも、個人の間の就寝室の分離というプライバシーの分離が先行している。(図5参照)

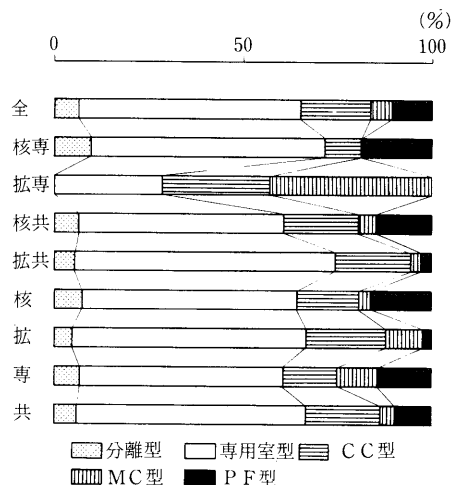


図5. 個室の実態

5). モノの所有状況

モノの所有状況においても、人の意識を把握することが可能である。ここでは、個室にある専用家具の所有率について、40種類のモノをあげた。(図6参照) これを8項目に分類し、

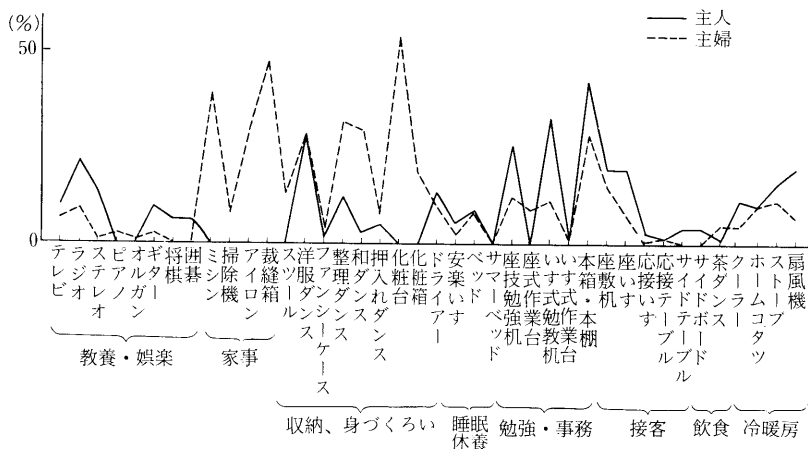


図6. 個室にある専用家具の所有率

その中の7項目について図示したものが図7である。主人と主婦の所有率の差をみると、教養娯楽、勉強・事務、冷暖房関係家具類では、専業、共働きともに主人が χ^2 検定1%水準(以下I段階とする)で主婦より多く、家事、収納行為に関する家具類では、主婦がI段階で主人より多くなっている。専業と、共働きの差は、主人、主婦ともに少いが、共働きの方が少し夫と妻の差が縮まる傾向があるといえる。

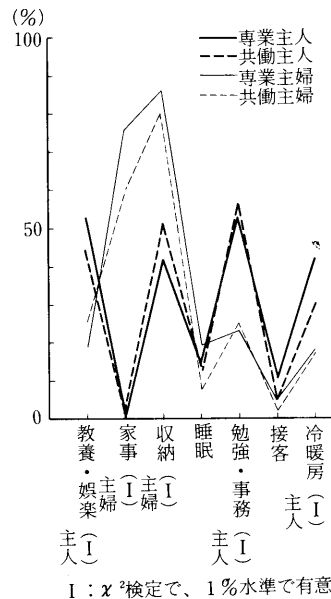


図7. 個室にある個人専用家具所有率

2. 住空間に対する意識(住居志向)

1). 住居の理想像

住居志向を把握するため、まず住宅の理想像について検討する。ここで設定する住宅の理想像は、①住居は食寝休養の空間が確保できればよい(食寝休養型)、②住居は接客空間を中心にするのがよい(接客中心型)、③住居は台所を中心とし、そこを団らん場として使う(家事労働型)、④住居は居間を中心にするのがよい(居間中心型)、⑤住居は個人生活を重視し個室を広くするのがよい(個室中心型)の5種類である。第1番に希望される住宅の理想像は、最も一般的なものになり、その次に希望されるものに、その人独自の希望が表現されることが多いと考え、希望住宅型を1位と2位の2つ答えてもらった。全体に

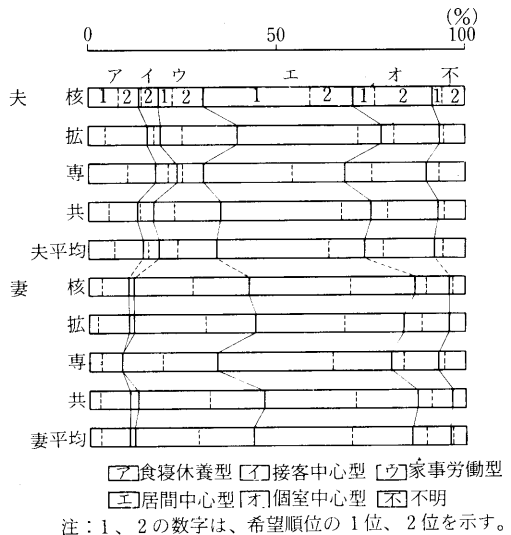


図8. 住宅の理想型

多いのは、家事労働型と居間中心型である。主人と主婦に差がみられるのは、接客中心型、家事労働型と個室中心型においてであり、主人では、接客中心型、個室中心型が、主婦では家事労働型の割合が多くなっている。これは、主人は個人指向、接客指向の強さを示し、主婦は家族指向、家事指向の強さを示していると考えられる。家族の性質別にみると、主人では、核家族と専業家庭で家事労働型が少く、個室中心型が多くなっており、拡大家族と共働き家庭ではその逆になっている。つまり、核家族と専業家庭で個人指向が強く、拡大家族と共働き家庭で家族指向が強くなっているといえる。妻では、大きな違いがみられるのは家事

労働型においてであり、特に専業と共働きに違いがみられ、共働きでは家事空間を団らの場と同一化する指向が強いといえる。しかし、家族の性質の違いよりも夫と妻の違いの方が大きく、異種の志向を示しているといえる。

2). 台所型の理想像

台所型の分類は、台所の実態で扱ったものと同様である。全体に、夫では妻よりKA型が多く、妻では夫よりDK型が多くなっており、台所を食事室や居間に開放する志向が妻の方に強い。家族の性質別にみると、夫では核家族と拡大家族別には殆んど違いがみられないが、専業と共働きには、大きな違いがあり、専業で独立キッチンが多く、共働きで台所でも軽い食事ができるKB型が多くなっている。このことは、妻も同様で、核家族と拡大家族には差はなく、専業で独立キッチン志向が、共働きではKB型志向が強くなっている。専業と共働きの差をみると、I段階で、主人、主婦とも専業においてKA型が多くなっている。以上つまり、主人は家事労働に作業性、隔離性を重んじ、主婦は合理性を重んじるという違いがあり、同様に、専業と共働きの比較では、専業に家事労働に作業性、隔離性を重んじ、共働きは合理性を重んじる傾向があるといえる。(図9参照) また、実態とくらべると、主人、主婦ともに、理想の台所型の方が開放度は大きくなっている。

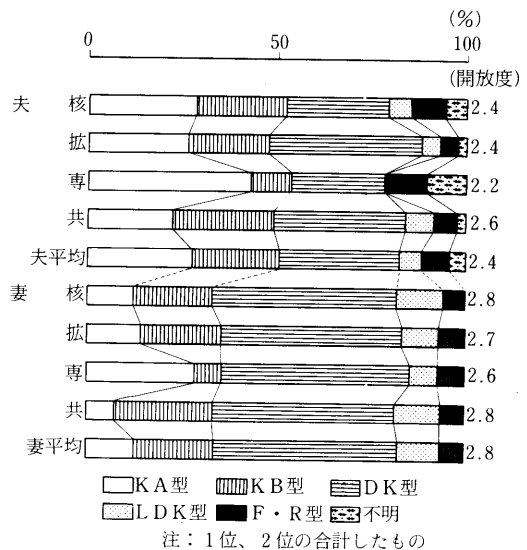


図9. 台所の理想型

3). 空間重視順位

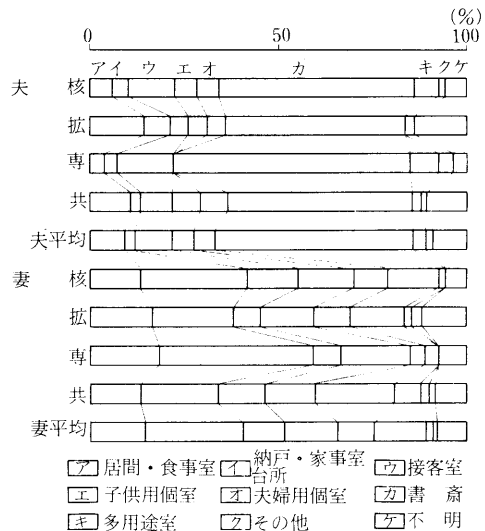
玄関、接客用客室、宿泊用客室、居間、台所、個室、収納空間の7種類の空間について、1位から7位までの重視順位をつけてもらうことにより、空間にどういう考えを持っているかを検討する。主人と主婦の差についてみると、まず台所は主婦で2位、主人で3位にあり、個室と位置が逆転している。また、収納空間の位置も主婦が4位、主人が6位であり、主婦では家事労働に関係のある空間が重視されているのに対し、主人では、接客空間、玄関という対外的格式空間が主婦より優先している。家族の性質別にみると、主人、主婦ともに核家族より拡大家族の方が玄関、接客空間を優先しており、専業と共働きの違いでは、主人においては共働きで台所の平均順位3.5位、専業で3.8位と共働らきで優先しており、主婦でも共働きで2.2位、専業で2.3位とわずかながら共働きの方が台所を優先しているが、その差は小さく、共働きと専業の差より、主人と主婦の差の方が大きいといえる。また、接客室、玄関では、専業より共働きの方が重視する傾向がある。つまり、主人では接客指向、個人指向が強く、妻では家事指向、家族指向が強い。また拡大家族では接客指向が強く、共働き家庭では家事指向、接客指向が強くなっている。(表2参照)

表2 空間の重視順位

種類\順位	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位
核 家 族 夫	居 間 1.7	個 室 2.9	台 所 3.5	接 客 室 4.0	玄 関 4.6	収 納 空 間 5.2	客 用 宿 泊 室 6.1
拡 大 家 族 夫	居 間 2.2	個 室 2.9	台 所 3.7	接 客 室 3.8	玄 関 4.4	収 納 空 間 5.1	客 用 宿 泊 室 5.9
専 業 夫	居 間 1.7	個 室 2.3	台 所 3.8	接 客 室 4.0	収 納 空 間 5.1	玄 関 5.1	客 用 宿 泊 室 6.0
共 働 き 夫	居 間 1.9	個 室 3.1	台 所 3.5	接 客 室 3.9	玄 関 4.3	収 納 空 間 5.2	客 用 宿 泊 室 6.0
夫全体平均	居 間 1.9	個 室 2.9	台 所 3.6	接 客 室 3.9	玄 関 4.5	収 納 空 間 5.1	客 用 宿 泊 室 6.0
核 家 族 妻	居 間 1.7	台 所 2.2	個 室 3.4	収 納 空 間 4.5	接 客 室 5.0	玄 関 5.1	客 用 宿 泊 室 6.2
拡 大 家 族 妻	居 間 2.2	台 所 2.2	個 室 3.3	収 納 空 間 4.5	玄 関 4.6	接 客 室 4.9	客 用 宿 泊 室 6.3
専 業 妻	居 間 1.5	台 所 2.3	個 室 3.3	収 納 空 間 4.5	接 客 室 5.1	玄 関 5.1	客 用 宿 泊 室 6.2
共 働 き 妻	居 間 2.0	台 所 2.2	個 室 3.4	収 納 空 間 4.4	玄 関 4.8	接 客 室 4.9	客 用 宿 泊 室 6.2
妻全体平均	居 間 1.9	台 所 2.2	個 室 3.4	収 納 空 間 4.5	接 客 室 4.9	玄 関 4.9	客 用 宿 泊 室 6.2

4). 独立、増加したい一室

住宅理想型、台所の理想型、空間重視順位は、現実の生活と直接関連しない仮定的な住居志向であるが、より現実生活と関連を持たせた住要求を把握するため、現在のすまいの中で、独立もしくは増加させたい部屋を一室あげるとするとどの様な部屋なのかを聞いたのが図10である。主人と主婦の差をみると、主婦においては、納戸、家事室、台所という家事関連室と、子供の個室がI段階で主人より多く、逆に書斎ではI段階で主人が主婦より多くなっており、主婦は家事労働のための家事関連室、主人は社会労働のための書斎という図式が現われていると考えられる。また、専業と共働き家庭の違いでは、主婦において専業では家事関連室が、共働きで書斎が多い。主人においては共働きで居間、食事室、子供用個室、夫婦用個室が多く、専業で接客室、書斎が多くなっており、自分のための空間を志向するものを個人指向、自分以外の家族の空間もしくは家族全員のための空間を志向するものを家族指向として、家族指向と個人指向の強弱で考察すると、専業主婦→共働き主婦→共働き主人→専業主人の順に個人指向が強くなり、家族指向が薄れるといえる。つまり、主人より主婦の方が家族指向が強く、主婦は専業の方が、主人は共働きの方が家族指向が強くなっており、共働きでは主人と主婦の差が少なくなるといえる。しかし、共働きと専業の違い



いより、主人と主婦の違いの方が非常に大きい。(図 10 参照)

5). 接客室と個室に対する意識

接客室に対する考え方を知る一つの方法として、個室、家族共用室と接客室の分離と結合のあり方を促える。これは、すまいを接客室と家族共用室を分けるよりまず個室を分離するという考え方(個室分離型)と、家族共用室と個室を分けるよりまず接客室を分離するという考え方(接客室分離型)の二つである。家族の性質別にみると、拡大家族の方が接客分離志向が強く、核家族で個室分離志向が強くなっており、妻においてその差が著しい。専業と共働きの違いでは、夫では殆んど差がないが、妻では共働きで個室分離志向が強くなっている。夫では、家族の性質別の差は少いが、妻ではその差が大きいといえる。

(図 11 参照)

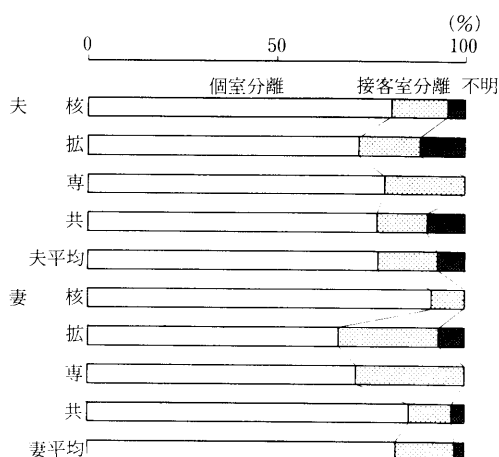


図 11. 接客室と個室に対する意識

6). 接客関連空間志向と台所志向の関連

対外的格式を表わす接客室、玄関と、対内的男女差別空間である台所空間に対する重視度は、それぞれ逆の相関を示すことが予想されるので、先に述べた空間の重視順位の内、台所と接客室の重視順位の関連、および台所と玄関の重視順位の関連について検討する。台所と接客室との重視順位の関連は、夫、妻とも関連があるが、夫の方がより大きな関連を持っている。これを相関係数で示すと、夫で 0.613、妻で 0.538 で、夫、妻ともに、かなりの相関があると考えられる。(図 12 参照)

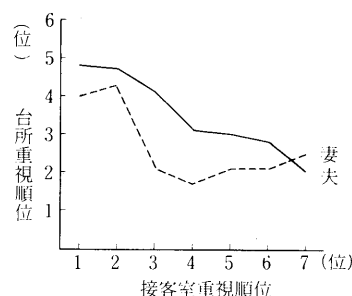


図 12. 台所と接客室の関連

次に、台所と玄関の重視順位の関連は、前者の関連ほど強くないが、やや関連を持っている。相関係数では、夫 0.519、妻 0.266 で、これも夫の相関の方が強い

(図 13 参照)

3. 住空間の実態と住居志向

住居志向は、実態に反映されると同時に、実態が住居志向を規定するという側面もあり、住空間に対する評価や要求が、住空間の実態によって規定されて出される。住居志向については、前述した様に、2種類の段階が考えられ、1つは、現実と直接関連を持たない仮定的志向、理想で、2つめは、現実から引き出される要求、評価である。これについても2つの段階が考えられ、1つは Need (必要の段階) でもあり、もう1つは Desire (欲求の段階) である。

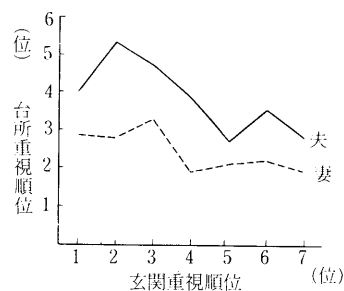


図 13. 台所と玄関の関連

そこで、前述した住空間の実態と住居志向の関連について検討する。

1). 台所型の実態と住居志向

台所型の実態が、希望する台所型とどのような関連を持つかを示したのが、図 14 である。実態において、台所が他の公室に開放される度合いが大きいほど、KBを除いて希望する台所型も開放度は大きくなる傾向がみられる。KB型の特に夫でKA型の希望の方へ傾むくのは、台所で行う食事と台所以外で行う食事の両方を行っているため、家事と関連を持たない夫は、ゆっくり食事ができるKA型を志向するようになるためと考えられる。

台所型の実態と空間の重視順位、住宅理想型、接客室と個室の分離に対する意識とは、特に顕著な関連はみられない。

2). 接客室の実態と住居志向

空間の実態の項で型分けした接客室型と接客室の重視順位の関連をみると、専用室型と寝室で接客を行うCG型で重視順位が高く、居間兼寝室で接客を行うCLG型、居間で接客を行うLG型では、重視順位が低くなっている。つまり、家族が常住する居間で客をもてなす場合には、接客室に対する重要性はあまり考えられておらず、家族で客を持てなすという、マイホーム的接客システムを持つ家庭であると考えられる。また、書斎で接客を行うもの(書G型)は、夫と妻で重視順位に違いがみられ、妻ではこの型が一番接客室を重視し、夫ではこの型はかなり低い重視順位になっている。このことは、実際書斎を使用する主人はこの部屋を書斎と促しているのに対し、使用しない主婦はこの部屋を接客室とみているという、見方の違いから生じると考えられよう。(図 15 参照)

また、接客室を個室と居間から分離する立場(接客室分離型)と、個室を接客室と居間から分離する立場(個室分離型)の違いと、接客室の実態との関連をみると、居間で接客をする場合(LG型)と書斎で接客をする場合(書G型)は、個室分離意識が強く、接客専用室を持つ場合(専用室型)と寝室で接客する場合(CG型)は、接客室を分離する意識が強くなっている。(図 16 参照)

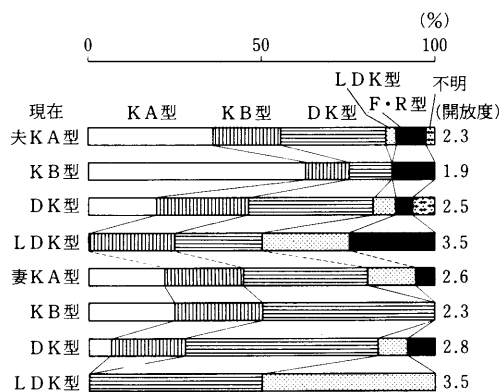


図 14. 現在の台所型別希望台所型

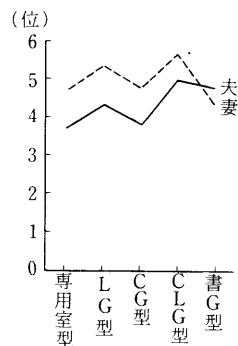


図 15. 接客室の実態別重視順位

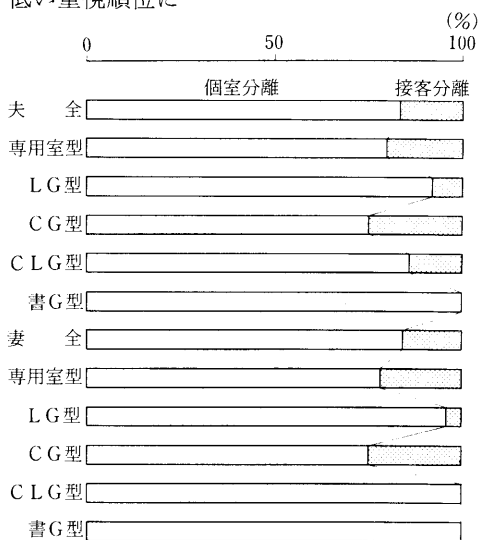


図 16. 接客室の実態別接客と個室の分離意識

以上は、理想とする志向、仮定としての意識であるが、現在のすまいに対して、独立・増加させたい一室を聞く場合には、実際の住要求として考えられる。これと接客室型との関連をみると、夫では、専用接客室を持たない型においても、接客室を要求するより、書斎を要求する割合が圧倒的に多く、妻でも接客室以外の部屋を要求する割合の方が増えており、専用接客室を持たないものは、専用接客室を所有したいという要求は少いといえる。居間兼寝室で接客する場合（CLG型）は、夫、妻ともに、居間を独立させたいと思っているものが多い。（図 17 参照）また、住宅理想型とは、顕著な関連はみられない。

3). 個室の実態と住居志向

個室の実態の所で型分けした個室型と、個室の重視順位との関連をみると、夫婦、子供ともに分離就寝している分離型で、夫、妻ともに一番重視順位が高くなっており、以下個室が夫婦寝室、子供寝室ともに確立している専用室型、子供寝室が共用化されているCC型と続くが、親子が同一室で就寝するMC型では、妻の重視順位が下がり、夫は上がっている。これは、就寝の仕方が決定されるのは妻によってなされるため、個室を重視しない妻によってMCという就寝の仕方が行われるためではないかと考えられる。居間で就寝するPF型の重視順位は、夫、妻ともにCC型と殆んど変わりがみられない。（図 18 参照）

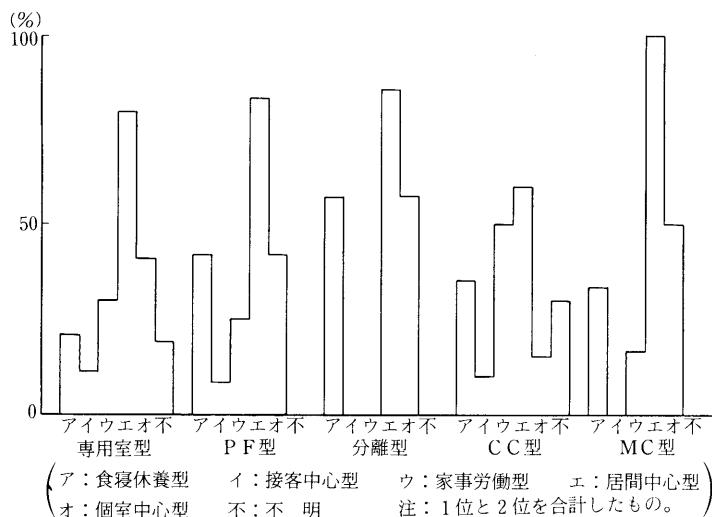


図 19. 個室の実態別住宅の理想型（夫）

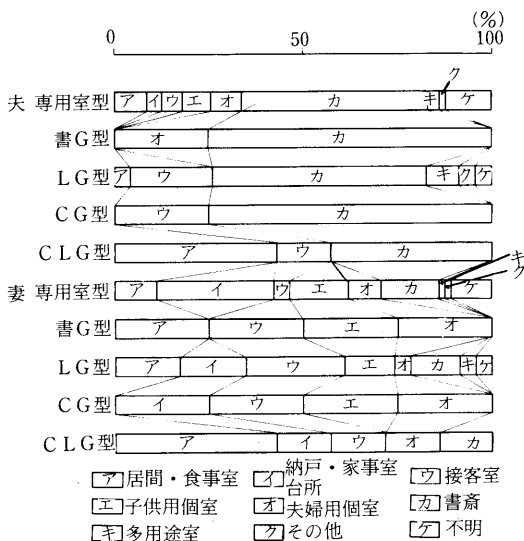


図 17. 接客室の実態別独立・増加したい一室

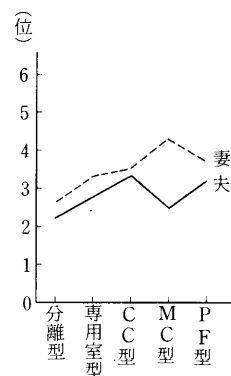


図 18. 個室の実態別個室重視順位

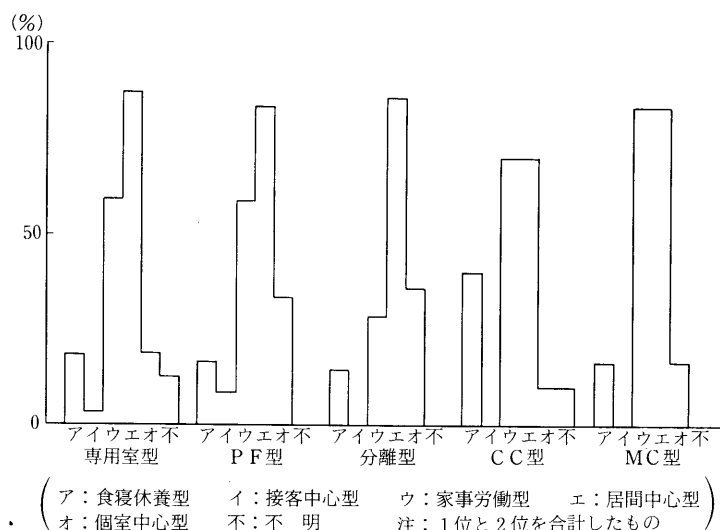


図 20. 個室の実態別住宅の理想像 (妻)

次に、個室型と住宅の理想像の関連についてみると、住宅理想型の個室中心型は全体に夫が高く、妻が低いが、分離型において、個室中心型が、夫、妻ともに他の型より一番高い割合を示している。家族指向を示すと考えられる家事労働型の増減と、個室中心型の増減は、逆の関連になっており、これで家族指向が強いのか、個人指向が強いかが推察できる。C C型で、夫、妻ともに個室中心型が他の型より低くなっており、就寝の仕方がC Cになっているのは、住空間に対する考え方から来ているといえるのではないだろうか。しかし、P F型では、夫、妻ともに個室中心型の比率が低くなっておらず、この場合は、この実態を生み出しているのは、住空間に対する考え方から来ているというより、住空間の狭さが、この実態を生みだしているといえるだろう。(図 19、20 参照)

以上の住宅の一般的理想像に対し、現在のすまいで要求される、独立・増加したい一室について、個室型別にみると、夫、妻ともに、異性の子供が同一就寝しているC C型では、子供室の要求が強くなっているが、同性の子供の共用室の場合は、子供室の要求は強くなっていない。また、親子が同一室で就寝するM C型では、妻の場合特に子供室、夫婦室を強く要求しているが、夫の場合は、それよりも書斎の要求の方が強くなっている。居間で就寝するP F型では、夫、妻ともに寝室の要求は強く出されていないが、居間の要求がかなり出されている。(図 21 参照)

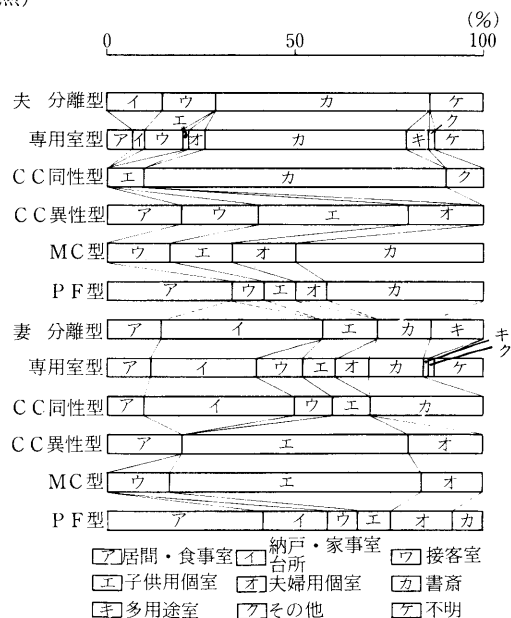


図 21. 個室の実態別夫妻別独立・増加したい一室

4. 住空間における行動様式

ここまで、空間の実態と住居志向について、家族の性質別、性別にみてきたが、次に空間に対し影響を持ち、逆に影響を受けると考えられる行動様式について検討する。行動様式は、モノ側と人側の両面から影響を受け、また影響を与えるものであると考えられる。そこで、行動様式における順番、位置、行事について、性別、年齢階級別にみていく。

(図 22 参照)

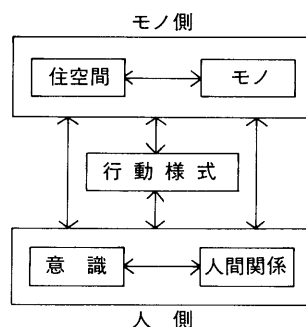


図 22. 行動様式関連図

1). 順番

ごはん盛りつけの順番、入浴の順番、新聞を読む順番についてその実態をみていく。まず入浴の順番は、29 件 (27.1%) の家庭で決定されている。順番記入の 27 件について表 3 に示す様に、家族員の性別、年齢階級別により、順番が明らかに違っている。核家族では、主人→男の子供→女の子供→主婦の順であり、拡大家族では、祖父→主人→男の子供→女の子供→祖母→主婦の順番である。同様に、ごはんを盛りつける順番についてみると、順番が決まっている家庭は、34 件 (31.5%) である。これを順番記入のある 30 件についてみたのが表 4 であり、この場合は、順番が非常に明確な傾向を持っている。核家族で、主人→男の子供→女の子供→主婦の順であり、拡大家族で、祖父→主人→祖母→男の子供→女の子供→主婦の順である。次に、新聞を読む順番が決まっている家庭は 18 件 (16.7%) のみであり、順番決定が行なわれていることは少い。このうち順番記入の 17 件についてみたのが表 5 であり、核家族で、主人→主婦・子供の順で、拡大家族で、祖父・主人→祖母→男の子・女の子→主婦の順になっており、家事労働と直接関係を持たないこの順番は前 2 者と比べると比較的ゆるやかになっている。しかし、これらの順位は、いづれも圧倒的に主婦の順位が最後になっていることが多く、決定理由からは、家事労働のためと生活上の時間的理由が殆

表 3 入浴の順番

主体が客体に対し優先する割合(%)

主体\客体	主人	主婦	祖父	祖母	男の子供	女の子供
主人		81.5	25.0	50.0		72.7
主婦	18.5		8.3	0.0		8.7
祖父	75.0	91.7		63.6		80.0
祖母	50.0	100.0	36.4			36.4
男子						100.0
女子	27.3	91.3	20.0	63.6	0.0	

表 4 ごはんを盛りつける順番

主体が客体に対し優先する割合(%)

主体\客体	主人	主婦	祖父	祖母	男の子供	女の子供
主人		100.0	0.0	60.0		93.3
主婦	0.0		0.0	0.0		0.0
祖父	100.0	100.0		100.0		100.0
祖母	40.0	100.0	0.0			63.6
男子						66.7
女子	6.7	100.0	0.0	36.4	33.3	

表 5 新聞を読む順番

主体が客体に対し優先する割合(%)

主体\客体	主人	主婦	祖父	祖母	男の子供	女の子供
主人		100.0	50.0	50.0		83.3
主婦	0.0		25.0	0.0		40.0
祖父	50.0	75.0		100.0		100.0
祖母	50.0	100.0	0.0			100.0
男子						50.0
女子	16.7	0.0	0.0	0.0	50.0	

んどであるが、生活上の時間的理由というのも、結局家事労働の時間のため妻が最後になるということであり、全て家事労働によると考えられる。以上、性別では男が、年齢階級では妻を除いて上の者が先に行くという形になっており、年齢と性別の要因では、性別の要因の方が強く現われている。(表6参照)

表6 順番決定理由

多項目回答、() は決定軒数に対する割合%

決定理由	入浴順	ごはん盛りつけ順	新聞を読む順
家事労働(準備、後始末)の為	13(44.8)	11(32.4)	
生活上の時間的理由	11(37.9)		15(83.3)
男子は先にするのが当然	1(3.4)	3(8.8)	1(5.6)
習慣	7(24.1)	20(58.8)	2(11.1)
不明、その他	1(3.4)	2(5.9)	1(5.6)
決定軒数	29	34	18

2). 位置

住居における座席の位置も家事労働との関連で決定されることが予想されるため、食卓と居間における座席の位置について検討する。まず、食卓に座る位置が決まっている家庭は、97件(88.2%)である。その座席について、台所と食卓の図及び食卓での家族員の席を図示してもらい、記入のあった88件について、その図から、独立キッチンの場合は台所への出入口に近い座席、DK型、LDK型の場合には、キッチンユニットに近い座席について、家族の成員別に示したのが表7である。これによると、核家族では、主婦→女の子供→男の子供→主人という順でキッチンユニット、台所の出入口に近い座席を占めている。拡大家族では、主婦→祖母→女の子供→男の子供→主人→祖父という順で近い位置を占める。この様に、キッチンユニット、台所への食卓での座席の距離は、性別、年齢階級により決定されているといえる。つまり、女が、また子供を除いて年齢階級の低い者が近い位置を占める。また、性別と年齢では、男の子供と女の子供を比較しても、年齢に関係なく女の子供がキッチンユニット、台所に近いことが殆んどであることから、性別による影響の方が大きいといえる。また、核家族と拡大家族についての差はみられなかった。主婦以外で一番近い位置を占める者は、祖母4件、女の子供4件、女の子供と男の子供が同距離1件、主人1件と男は皆無に近い。(表7参照)

表7 キッチンユニット、台所の出入口と食卓の座席の近さ

近：主体が客体よりも台所に近い割合 同：主体が客体と同じ近さの割合

客体 主体	主人		主婦		祖父		祖母		男の子		女の子	
	近	同	近	同	近	同	近	同	近	同	近	同
主人			3.4	6.8	52.9	29.4	19.4	19.4	18.4	46.9	22.4	8.2
主婦	89.8	6.8			88.2	5.9	61.3	25.8	78.8	19.2	61.2	28.6
祖父	17.6	29.4	5.9	5.9			0.0	13.3	0.0	40.0	14.3	28.6
祖母	61.3	19.4	12.9	25.8	86.7	13.3			66.7	0.0	50.0	16.7
男の子	34.7	46.9	1.9	19.2	60.0	40.0	33.3	0.0			21.2	12.1
女の子	69.4	8.2	10.2	28.6	57.1	28.6	33.3	16.7	66.7	12.1		

注 ・位置が決定している97件のうち不明を除いた88件についての数字
・子供は小学生以上についてのみ対象とした

同様に、居間に座る位置が決定しているのは23件(21.3%)で、食事の場所と居間が同じ場所である家庭が7件ある。23件中不明が8件あるが、残り15件のうち14件は主婦が台所に一番近い位置である。食事の位置と同傾向であるが、位置が決定している比率がかなり低

く、家事労働とのつながりが、より密接なのは、団らんより食事の方であり、そのため、食卓ではそれだけ主婦が、キッチンユニット、台所に近い位置を占めることが多くなっていると考えられる。

3). しきたり、行事

集会・寄合、法事、結婚式・披露宴を家で行う家庭は、共働きと専業家庭の間に差はなく、核家族と拡大家族では、Ⅰ段階で拡大家族の方に多い。集会・寄合、法事は比較的に住宅内で行われている。前記三種類の行事のうちのどれかを行う家庭は56件あり、そのうち、行事の時だけしか使わない部屋を持つ家庭が9件あり、うち7件が拡大家族である。また、行事を行う時に、地位、性別で位置が決まっている家庭が23件(41.4%)ある。これもやはり拡大家族に多い。家で行事を行うか行わないかを、先の空間の重視順位のうちの接客空間の重視順位と関連させると、行事を住宅内で行う家庭では、主人は3.8位、主婦は4.7位、行事を住宅内で行わない家庭では、主人は4.0位、主婦は5.1位であり、主人、主婦ともに行事を行う家庭で、若干接客空間の重視順位が高い。(表8参照)

表8 住宅内で行事をする、しない、行事用独立室の有無
行事の時の位置の決定の有無の家族型による差

() は%

行事	核 家 族		拡 大 家 族		χ^2 検定 核家族と拡大家族
	行 う	行わない	行 う	行わない	
集 会 、 寄 合	17 (25.4)	50 (74.6)	23 (53.5)	20 (46.5)	$\chi^2=8.947$ $P<0.01$
法 事	9 (13.8)	56 (86.2)	33 (78.6)	9 (21.4)	$\chi^2=49.990$ $P<0.01$
結 婚 式 披 露 宴	1 (1.5)	65 (98.5)	9 (20.9)	34 (79.1)	$\chi^2=7.579$ $P<0.01$ イエーツ修正
行事室	核 家 族		拡 大 家 族		χ^2 検定 片側検定
	行事室独立	兼 用	独 立	兼 用	
住宅内で行事をする家庭の行事用室	2 (10.5)	17 (89.5)	7 (21.9)	25 (78.1)	$\chi^2=0.072$ $0.4<P<0.35$ イエーツ修正
位 置	核 家 族		拡 大 家 族		χ^2 検定 片側検定
	決まっている	決まっていない	決まっている	決まっていない	
住宅内での行事の際の位置	5 (26.3)	14 (73.7)	18 (52.9)	16 (47.1)	$\chi^2=1.684$ $0.1<P<0.05$ イエーツ修正

IV. 終わりに

以上のことをまとめてみると

(1). 住空間の実態では、①台所が開放的であるのは共働き家庭においてであり、専業、拡大家族では独立キッチンが多い。②専用の接客室を持つのは拡大家族、共働き家庭で多く、共働き家庭で多いのは、家の片づけの余裕がない共働き家庭では、接客室を独立することでカバーしているためと思われる。③個室では、拡大家族で行為の機能別の空間の分割の仕方が行なわれるため、PF型が少なく、CC型、MC型が多くなっており、核家族では、個人のプライバシーを重んじるため、PF型が多くなって、CC型、MC型が少なくなっている。④モノの所有は、夫と妻で非常に違いがあり、個人的行為に関するものは夫で、家事に関するものは妻で所有率が高い。

(2). 住居志向では夫と妻で顕著な差がみられる。(1)住宅理想像では、夫に接客室中心型、個室中心型が、妻に家事労働型が多くみられ、共働き家庭で家事労働型が、専業と核家族で個室中心型が多くみられる。②台所型の理想においては、夫は閉鎖性を、妻は開放性を求め、専業で閉鎖性を、共働きで開放性を求めている、実態と同様の傾向である。③空間の重視順位も、夫で個室、接客室の重視順位が高く、妻で台所の重視順位が高い。また共働きで台所の重視順位が高く、拡大家族と共働きで接客室の重視順位が高い。④独立・増加させたい一室では、夫で書斎が多く、妻で家事関連室、子供用個室が多くなっており、夫と妻の差は共働きで小さくなる。⑤個室分離か接客室分離かという考え方では、拡大家族で接客室分離意識が強く、核家族で個室分離意識が強い。⑥接客指向の強弱と、家事指向の強弱は逆の関連を持つ。

(3). 住空間の実態と住居志向の関連は、①台所が開放的な場合は、希望の台所型も開放型を希望する。②接客は専用室型、C G型で重視順位が高く、接客分離意識強い。L G型、C L G型で重視順位が低く、L G型、書G型で個室分離意識強い。③個室は、分離型と専用室型で重視順位が高く、C C型、P・F型では低くなる。④住要求は、きわめて矛盾のある住み方の場合、住要求として表現されるが(C L G型、C C異性子型、P F型)、ある程度までの段階では要求は弱い(C G型、L G型、書G型、C C同性子)。また要求は妻においては現実に関わりのある矛盾について多く出され、夫では、現実に関連のある部屋の要求は少なく、これは夫が現実生活と深く関わっていないためと考えられる。また、余裕室がある家庭でC C型の住み方がみられたが、これは、住居志向が原因となっていることがわかった。

(4). 行動様式は、順番、位置において、家事労働に関連のあるものは、性別ではっきり規定されている。また、しきたり、行事においても、住空間の実態、住居志向と同様に、拡大家族で多く行なわれており、行動様式は、住空間の実態、住居志向と関連を持っているといえる。

この様に、住居志向にも、行動様式にも、主人と主婦に差がみられ、主婦では家事労働との関連が非常に強く、それが行動様式に表われ、空間や住居志向にも反映していると考えられる。住居志向は、共働きにおいて、夫と妻の差がやや小さくなるとはいえ、まだまだ大きな開きがみられる。住み方としての実態は、住居志向から規定されると同時に、住居志向を規定するという側面を持っていた。そこで、共働き家庭では、住空間を主婦一人が家事労働をする様な形から、団らん化した形で家事労働が行える様に改変することにより、行動様式を改変し、住居志向を改変していくことを考えなければならない。